



槇野のステップスにおける個展の活躍もめざましい。槇野は今回ギャラリー内では主にデパートのパッケージの作品を6点、事務所に旧作12点を展示した。

槇野はこれまでもプラモデルの箱、接着剤、鉛筆、消しゴムなど、日常生活に溶け込んでいるレディメイドを主題として、彫刻を形成してきた。

それはレディメイドのギミックや模刻というよりも、驚きや喜びが主眼となっているのではないかと。槇野に思想がないのではない。小難しい議論が不要ということだ。

小難しい議論はなくとも、槇野の作品には様々な発想が盛り込まれている。果実や植物といった生き物を模刻しない、技術を見せ付けない等と、探るべき点は様々にある。

時代や場所が違えども、人類はその発生から神を生み出し、偶像崇拜禁止を経て、やがて絵画や彫刻という姿に表わし始めた。そして、仏像同士を模刻するまでに至った。

人間は自らが生み出した神を恐れ、乗り越えようと努力し、遂には神を超えるのではなく自らが神となった。そして、野蛮な戦争を繰り返し、絶滅寸前である。

今回、槇野が選んだ主題は、やはり私達の日常、特にステップスが位置する銀座ではよく見かける包装紙であろう。作品を見るとつい、微笑んでしまう。

驚愕すべきは封をするセロテープにすら徹底的に彫り込んでいる点である。槇野が何を見て何を考え、何をしようとしているのかを考えることもまた、楽しくなる。

